

奈良団賛（ならうちのはのさん）

あらすじ

扇と比較して、団扇（うちわ）の美点をたたえた文章である。扇が多芸多能で公的なものであるのに対し、団扇が一芸無能で私的なものであるがゆえに、使用者にくつろぎを与えることをユーモアあふれる表現で描き出している。

本文（小学館『新編日本古典文学全集 近世俳句俳文集』による）

青によしならの帝の御時（おほんとき）、いかなる叡慮（えいりょ）にあづかりてか、此地の名産とはなれりけむ。

世はただ其道の芸くはしからば、多能はなくてもあらまし。かれよ、かしこくも風を生ずるの外は、たえて無能にして、一曲一かなでの間にもあはざれば、腰にたたまれて公界（くがい）にへつらふねぢけ心もなし。只木の端と思ひすてたる雲水の生涯ならむ。

さるは桐の箱の家をも求めず。ひさごが本（もと）の夕すずみ、昼ねの枕に宿直（とのみ）して、人の心に秋風たてば、又来る夏を頼むとも見えず。物置の片隅に紙屑籠（かみくづかご）と相住（あひずみ）して、鼠のあしにけがさるれども、地紙（ぢがみ）をまくられて野ざらしとなる扇にはまさりなむ。

我汝（なんぢ）に心をゆるす。汝我に馴（な）れて、はだか身の寝姿を、穴かしこ、人にかたる事なかれ。

袴（はかま）着る日はやすまする団（うちは）かな

歎老辞（たんらうのじ）

あらすじ

作者が官を辞して、前津（名古屋市中区上前津）の地に隠居した 53 歳の作。老境に入った自らの心境を、芭蕉をはじめとする多くの故人を引き合いに出しながら、ユーモアを交えてしみじみと語っている。

本文

（小学館『新編日本古典文学全集 近世俳句俳文集』による）

芭蕉翁は五十一にて世を去り給ひ、作文（さくもん）に名を得し難波の西鶴も、五十二にて一期を終り、「見過しにけり末二年」の辞世を残せり。我が虚弱多病なる、それらの年もかぞへこして、今年は五十三の秋も立ちぬ。為頼（ためより）の中納言の、若き人々の逃げかくれければ、「いづくにか身をばよせまし」とよみて歎かれけんも、やや思ひしる身とは成れりけり。

さればうき世に立交らんとすれば、なきが多くも成りゆきて、松も昔の友にはあらず。たまたま一座につらなりて、若き人々にもいやがられじと、心かろく打ちふるまへども、耳うとくなれば咄（はなし）も間違ひ、たとへ聞ゆるささやきも、当時のはやり詞（ことば）をしらねば、それは何事何ゆゑぞと、根問（ねどひ）・葉問（はどひ）をむつかしがりて、枕相撲（まくらずまふ）も拳酒（けんざけ）も、さわぎは次へ遠ざかれば、奥の間に只一人、火燧蒲団（こたつぶとん）の嶋守となりて、「お迎ひがまゐりました」と、とはぬに告ぐる人にも「忝（かたじけな）し」と礼はいへども、何の忝き事かあらむ。

六十の髭を墨にそめて、北国の軍（いくさ）にむかひ、五十の顔におしろいして、三ヶの津の舞台にまじはるも、いづれか老を歎かずやある。歌も浄るりも落し咄も、昔は今のに増りし物をと、老人毎に覚えたるは、おのが心の愚也。物は次第に面白けれ共（ども）、今のは我が面白からぬにて、昔は我が面白かりし也。

しかれば、人にもうとまれず、我も心のたのしむべき身のおき所もやと思ひめぐらすに、わが身の老を忘れざれば、しばらくも心たのしまず。わが身の老を忘るれば、例の人にはいやがられて、あるはにげなき酒色のうへに、あやまちをも取出でん。されば老はわするべし。又老は忘るべからず。二つの境まことに得がたしや。今もし蓬莱（ほうらい）の店をさがさ

んに、「不老の薬はうり切れたり。不死の薬ばかり有り」といはば、たとへ一錢に十袋うるとも、不老を離れて何かせん。不死はなく共不老あらば、十日なりとも足んぬべし。神仙不死何事をかなす、只秋風に向つて感慨多からむ」と、薊子訓（けいしきん）をそしりしもさる事ぞかし。

ねがはくは、人はよきほどのしまひあらばや。兼好がいひし四十足らずの物ずきは、なべてのうへには早過ぎたり。かの稀（まれ）也といひし七十迄はいかがあるべき。ここにいささかわが物ずきをいはば、あたり隣の耳にやかからん。とても願の届くまじきには、不用の長談義いはぬはいふに増らんをと、此論ここに筆を拭（のご）ひぬ。